

短 報

看護ゼミナール「チームチャレンジ：多重課題， 複数受持ち実践ゼミ」報告

佐居 由美¹⁾ 笠井 愛²⁾ 三浦友理子¹⁾ 中島 千春²⁾
福島 阿衣²⁾ 千々輪香織²⁾ 柳橋 礼子²⁾

Practice Report for Nursing Seminar [Team Challenge : Multi Problems, Handling Several Patients]

Yumi SAKYO¹⁾ Megumu KASAI²⁾ Yuriko MIURA¹⁾ Chiharu NAKAJIMA²⁾
Ai FUKUSHIMA²⁾ Kaori CHIJIWA²⁾ Reiko YANAGIBASHI²⁾

[Abstract]

Our college has a Nursing Seminar class called Team Challenge for senior students to take as an elective. Nine students are taking it in 2017. The students search for information on the seminar topic, which they choose based on examination of documents and nighttime fieldwork at the hospital. The topics were a priority decision when I oversaw multiple patients with 24-hour nursing (because students do not have experience with night duty), a membership team in medical care, and so on. In 2015, we conducted a study in which students evaluated and improved this class. The investigation was carried out using a questionnaire survey. We received responses from four of six students. As the reason for taking the class, four students answered that they wanted to experience nighttime work in the ward. The comments were that “the staff in the hospital was very kind and nice to the students for whom this was the first experience of nighttime work”, and “there was no anxiety regarding communication with a nurse”. Regarding good aspects of this class, the students answered, “We were able to know what was required to be a nurse, what would be the problem, and how to think it out”; “We could think deeply about the basic system of nursing and the way of work-ing as a team”; and so on. For this class, it was suggested that it was an effective way to learn about the period of progressing from a student to a nurse.

[Key words] nursing seminar, Team Challenge, night shifts, handling several patients, field work

[要 旨]

【背景】本学では看護学部4年生の選択科目「看護ゼミナール（チームチャレンジ）」を開講している（2017年度：受講者9名）。本ゼミは「チームの一員として看護実践を遂行するために必要な要素およびその習得のための方略について考察することができる」を学修目的としている。文献検討および夜勤帯等のフィールドワークを踏まえ、学生は選択したテーマを探究する。テーマは、「複数患者を担当する」、「チームとは何か：リーダーシップ、メンバーシップ」、「24時間の看護」等である。2015年度に、本科目の評価および改善を目的に履修者を対象に調査を行った。

【方法】科目への要望等からなる10項目のアンケート調査を実施した。[倫理的配慮] 調査は回答者が特定されない方式のwebにて行い、参加は任意である旨明記した。

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
2) 聖路加国際病院看護部・St. Luke's International Hospital, Department of Nursing

【結果】2015年度履修者6名中4名から回答があった。「本科目選択理由」として4名が、「夜勤帯フィールドワークを体験したかった」と回答した。「本科目（病棟側）への要望」として「病棟スタッフが初夜勤の学生を、すごく大切に親切にしてくださって、その面での（看護師さんと学生の距離感があって不安など）気持ちの辛さは全くなかった」等の記載があった。よかった点として「看護師としてこれから働いていくにはどのようなことが必要か、何が課題で、どのような工夫がされているのかを知ることができた」、「看護を提供する上で基盤となるシステムやチームのあり方について考えを深められてとてもよかった」等の回答があった。

【結語】本ゼミナールは、学生から新人看護師への移行期の学習として有効であることが示唆された

【キーワード】 看護ゼミナール，チームチャレンジ，夜勤帯，複数受持ち，フィールドワーク

I. はじめに

聖路加国際大学（以下、本学）では、学部4年次に総合実習「チームチャレンジ（選択必修2単位）」^{1)～6)}を開講している。本実習の主な学習目標は、「学生がこれまでの実習を通して獲得した看護実践能力を統合し、さらに高め拡大することができる」、「夜間帯を含む実際の臨床看護実践に近い状況で実習を行い、複数患者担当など多重課題による優先順位について考えることができる」という2点である。本科目では、3年次までの実習では経験することの少ない、複数受持ち、夜間帯実習を実施し、チームの一員として臨床状況に近い状況で実習を行う。教育現場と実践との乖離を埋める実習として位置づけており、看護学生から新人看護師への橋渡しをする実習である。

本学のカリキュラムでは、実習を3つのレベルに分類し、各レベルでの実習目標を設定している（表1）。総合実習は既修の科目を統合したレベルⅢの実習と位置づけられている。総合実習「チームチャレンジ」では、「チームアプローチにおける看護の役割を認識し、チームの一員として主体的にメンバーシップをとることができる」という実習目標（表1：網掛け部分）に焦点をあて、学生は複数受持ちや夜勤帯実習にて発生する多重課題を体験し、時間切迫や割り込み業務が発生するなかでの優先順位のつけ方について学ぶ。これらの視点について学びを深めるため、「総合実習チームチャレンジ」の前提科目として、2012年度より、「看護ゼミナール：チームチャレンジ（選択1単位）」を開講した。本稿では、開講6年目を迎える本ゼミの概要と、2014年度に実施したアンケート結果について報告する。

表1 実習レベル目標（2011～2014年度入学生）

レベルⅠ ・総合実習 ・養護実習Ⅰ ・公衆衛生看護学実習Ⅰ	保健医療システムならびに長期的な時間的予測の観点を含めて、個人・家族・集団（組織・チーム）・社会という看護の対象の広がり理解できる。	人間・環境・看護の相互作用を主体的に評価・修正し、発展させることができる。	情報収集、課題判別、計画立案、実施、評価の一連のプロセスを効果的に活用する。	主体的に、対象の状況に適した方法を選択・創造し、安全安楽に看護技術を提供できる。	チームアプローチにおける看護の役割を認識し、チームの一員として主体的にメンバーシップをとることができる。	・対象に誠実に向き合い、真摯な態度で行動できる。 ・内省に基づき、対象の価値観を尊重し、その人にとっての最善を考えて行動できる。
レベルⅡ ・小児看護学 ・周産期看護学 ・成人看護学（急性期） ・成人看護学（慢性期） ・老年看護学 ・精神看護学 ・地域・在宅看護学実習	生涯発達、健康状態、生活の変化、文化や地域という観点から、各領域における対象の個性を理解できる。そのことを通じて、看護の対象の多様性理解することができる。	人間と環境と看護との相互作用を通じて看護職としての関係を構築することができる。	看護実践に必要な情報を収集し、看護上の課題を判別し、計画・立案・実施・評価できる。	対象の特性・反応に合わせた看護技術を根拠を踏まえて選択し、安全安楽に実施できる。	自分が提供する看護ケアを表明し必要な支援を求めることができる。対象を取り巻く保険医療福祉チームと、各メンバーの役割を理解することができる。	・自己洞察を深め、倫理的・建設的思考をもつことができる。
レベルⅢ ・コミュニケーション実習 ・基礎看護技術実習 ・看護展開論実習	看護の対象としての個人・家族・環境を理解することができる。	自分の関わりを通して、人間と環境と看護の相互作用を理解し、対象のニーズをふまえて、行動できる。	看護実践に必要な情報を収集し、日常生活行動における看護上の課題を判別し、計画・立案・実施できる。	原理・原則に基づいて、看護技術（ヘルスアセスメント技術、生活支援技術）を安全安楽に実施できる。	医療チームメンバーにおける看護師の役割を考える。医療チームメンバーにおける看護学生としてのメンバーシップをとれる。	・看護実践を通して、看護に対する自分の考えを述べるができる。
	看護の対象（人間・環境）	相互作用	看護実践のための思考過程	看護技術の実施	チームアプローチ	看護職としての責務・倫理

Ⅱ. 看護ゼミナール：チームチャレンジの概要

本ゼミは、総合実習「チームチャレンジ」の前提科目（受講推奨科目）として開講し、「チームの一員として看護実践を遂行するために必要な要素およびその習得のための方略について考察することができる」を学修目的としている。この学修目的を達成するため、課題を設定し（表2）、文献検討およびフィールドワーク、ゼミナールでのディスカッションを実施する。

表2 看護ゼミ「チームチャレンジ」課題テーマ

1. 複数患者を担当する
2. チームで医療する
チームとは何か：リーダーシップ、メンバーシップ
チーム医療における People-Centered Care
24時間の看護：看護提供方式
チーム間の情報共有

1. ゼミのスケジュール（図1）

1回目のゼミにて、学生は提示した課題（表2）から関心のあるものを一つ選択し、履修者間にて分担を決める。2017年度は受講者9名が、「チームとは何か」、「24時間看護：看護提供方式」、「複数受持ちによる優先度の決定」、「チーム間の情報提供」の4つのテーマに分かれ、課題を探究した。次に、グループにて文献検討を行い、その結果を発表する。発表時には、教員を含むゼミナールメンバー全員にてディスカッションを行う。文献の検討結果およびディスカッションを踏まえ、学生は病棟でのフィールドワークにおける観察内容を明確にする。

文献検討後、学生は自身が観察したい内容に合わせて、フィールドワークの希望（時間帯および実施病棟）を教員に提出する。教員は学生の希望を踏まえ、看護部長の了解を得て、病棟の看護管理者とフィールドワークの調整を行う。

2017年度は、夜勤帯および日勤帯の2回フィールドワークを実施した学生が7名、日勤帯のみを実施した学生が2名であった。病棟は、実習病院の看護部長および病棟看護管理者の協力のもと学生の希望が配慮され、内科混合病棟1名、呼吸器病棟2名、循環器病棟4名、泌尿器科婦人科を中心とする病棟で2名の学生がフィールドワークを実施した。

それぞれの学生のフィールドワークが終了後、各課題について、文献検討の内容を含めてフィールドワークの

結果をまとめ、発表を行う。3年間の各専門領域での実習を経たあとのフィールドワークでは、自身が数カ月後に実践することを念頭に置きながら、学生はそれまでに培われた多様な視点で臨床場面を観察してくる。そのため、まとめの発表では、チームで実践するために必要な能力について、自身の看護実践能力について、熱心な議論が毎年展開される。

Ⅲ. 看護ゼミナール：チームチャレンジの評価

2015年度に、本科目の評価および改善を目的に履修者を対象にアンケート調査を行った。調査内容は、「履修目的」、「開講時期」、「本科目の改善点」、「要望」など10項目であった。履修者6名中4名から回答があった。

〔倫理的配慮〕調査は、回答者が特定されない方式のwebにて行った。科目の内容改善を目的に実施し、参加は任意であること、匿名化されて結果は公表される旨、アンケートの冒頭に明記した。

1. 本科目の選択理由

本ゼミナールを選択した理由について、選択肢にて回答を求めた結果、4名全員が「夜勤帯フィールドワークを体験したかった」と回答した。ついで、「複数受持ちに関心があった」、「チームの一員としての看護実践について考察したかった」、「その他：どの専門領域にも通じる内容設定であったため」が各2名であった。その他、3年次までの実習で体験しない夜勤帯、複数受持ち、また、特定の領域に特化しないジェネラルな内容が、本科目の理由としてあげられていた。

2. 本科目の学習方法について

学習方法のより効果的な方法については、「少人数であったこと、また各々のフィールドワークの場所や主なテーマが異なっていたことから、考えをより深めていくためには、テーマごとの発表と質疑よりも、学生それぞれのフィールドワークの概要、考えたことや疑問について共有し、より細かな議題で全体で自由に討議する方がよいのではないかと感じた」という意見があった。教員がテーマを提示するのではなく、フィールドワークでの体験の内容により、学生自身が関心をもったテーマを自由に設定して探究したいという学生の学びに深さがうかがえた。

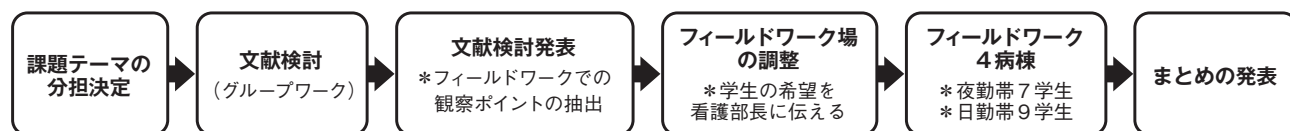


図1 ゼミのスケジュール

3. 開講時期について

本科目は4年生の前期に開講しているが、開講時期として「3年生の臨地実習終了後」が適しているという意見があった。その理由として、「実習で生じてしまった、臨床と学生実習（学生の認識）の間の悪いギャップを、より早い段階で修正する必要があるため」、「就職活動をする前に、自らが就労する環境を検討するための知識をもっとつけるべきだから」との回答がみられた。本ゼミを履修した学生の中には、3年次に「悪いギャップ」として感じた実習体験を払拭したいという期待や、就職活動の前段階として、臨床により近い体験を求めている学生がいることが分かった。

4. フィールドワークについて

本ゼミのフィールドワークについて、「事前準備」、「体制への希望」の2点について意見を得た。

1) 事前の準備として必要なこと

「目標を明確に自分で設定すること。あくまで私のイメージだが、教育者側からの学んで欲しい視点がよい意味で少なく、それがかえって自分の目標を設定しやすかった。そのため、モチベーションが非常にアップした」、「各グループの文献検討の結果を全員で共有していたので、各テーマについて（実際の臨床現場で）どのように行っているかを知識として入れておけた。そのため、実際を見るときに、自分の知りたい側面がはっきりしていたのがよかった」という意見があった。自ら目標を設定すること、文献検討によってフィールドワークにて観察する内容について視点を定めておくことが、事前準備として必要であることが確認された。

2) 病棟側または大学側の体制についての要望

体制については、「病棟スタッフが、初めての夜勤の学生をすごく大切に親切にしてくださった。そのため、看護師さんと学生の距離感があっての不安などの気持ちの辛さは全くなかった」、「興味のある病棟に行くことができ大変満足です!」、「行きたい病棟、自分自身で目標を設定できて、一番モチベーションの高い実習でした」との回答があり、希望する病棟でフィールドワークを行い、選択した課題の中でも、自身で目標を設定することが可能であった学習方法は、4年次の統合科目として適していることが示された。

5. 本科目を履修してよかったこと（表3）

本科目を履修してよかった点として、「看護師としてこれから働いていくにはどのようなことが必要か、知ることができた」、「第三者的な立場で冷静に見ることができた」といった回答があり、看護師の看護の実践を客観的に知ることができたことが、学生にとって大きな意味を持っていたことがわかった。

表3 履修してよかった点

- ・看護師としてこれから働いていくにはどのようなことが必要であり、課題であり、工夫がされているのかを知ることができた。その実際を、看護師でも患者でも受持ちを持つ実習中の学生ではなく、第三者的な立場で冷静に見ることができた。
- ・学生と看護師の中間のワンクッション、心構えを得ることができた。新人としての嫌な側面だけでなく、支援の工夫がされていることがより分かり、夜勤のマイナスのイメージがつくのではなく、利点・欠点を考えて結果ポジティブなイメージを持つことができた。
- ・今までの実習の中で一番リアルな病棟の様子・雰囲気を経験できた。これを見ないで就職すると心が折れる新人看護師もいそうだと思う。

表4 本科目の改善点

- ・テーマごとの発表と質疑よりも、各々がフィールドワークの概要と考えたことや疑問について共有し、テーマよりもより細かな議題をピックアップし、全体で自由に討議する方がよい。
- ・早期離職の防止や、看護集団全体をよりよくするために行動できる人材の教育のためにも、開講時期の変更や、事前に科目紹介としてこの魅力をアピールし、多く学生が履修するようにすべき。

また、「新人の嫌な面だけでなく、支援の工夫」を知ることができ、「夜勤について利点欠点を含め考え、結果的にポジティブなイメージを持つことができた」というコメントもあり、新人看護師や夜勤について抱いていた負のイメージが払しょくできたことがうかがえた。

6. 本科目の改善点（表4）

本科目の改善点として、「（実際の臨床の場を知ることができるよう）早期離職防止のために、多くの学生が履修できるようがよい」という回答があった。卒業年度である4年次に、夜間帯や複数受け持ちなど実際の臨床場面について探求することで新人看護師のリアリティーショックが軽減され、早期離職が防止できる、という意見からは、学生は新人看護師としての自身のあり方を常に考えていることが推察された。

IV. おわりに

2015年度の調査結果から、学生からの評価の結果、開講時期、科目紹介の方法、課題テーマ設定に検討の必要があることが明らかになった。学生は、夜勤帯の看護実践に興味があり、本科目を履修していた。夜勤帯を主とするフィールドワークにおいて、客観的に臨床現場を観察することで、今後の自身の課題を明確にするとともに、臨床現場の新人看護師への支援体制を肌で感じ、社会人としての自分をイメージすることができており、本ゼミナールが、学生から新人看護師への移行期の学習として有効であることが示唆された。今後も臨床と教育の現場との協働をより深め、学生の学びの場をよりよいものにしていきたいと考えている。

謝辞

学生を気持ちよく受け入れてくださった病棟の皆様、ありがとうございました。伊東美奈子氏（元基礎看護学）、中村綾子氏（元看護管理学）は、本ゼミの初期を支えてくれました。本ゼミナールにご協力くださったすべての皆様に心から御礼申し上げます。

特に、「総合実習チームチャレンジ」の生みの親である看護教育学の松谷美和子教授、松谷先生と共に「複数受持ち夜間帯実習」を始めてくださった故後藤桂子氏に、深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 佐居由美ほか. 看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める総合実習の効果 看護学生から臨床看護師へ. 聖路加看護学会誌. 2009;13(1):24-33.
- 2) 松谷美和子ほか. 看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める「総合実習（チームチャレンジ）」の評価 看護学生と看護師へのフォーカスグループ・インタビューの分析. 聖路加看護学会誌. 2009;13(2):71-78.
- 3) 奥裕美ほか. 看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める「総合実習（チームチャレンジ）」の評価 看護学生の実習記録の分析. 聖路加看護学会誌. 2009;13(3):62.
- 4) 奥裕美ほか. 看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める「総合実習（チームチャレンジ）」の評価 看護学生の実習記録の分析. 聖路加看護学会誌. 2010;14(1):17-25.
- 5) 松谷美和子. 学生から看護職業人への節目を支える看護学教育 大学と臨床の連携で体系化した総合実習—チームチャレンジ. 日本看護学教育学会誌. 2010;20:80-81.
- 6) 佐居由美ほか. 【「複数受け持ち」実習をより効果的に】受け持ち患者を増やしていく実習 総合実習「チームチャレンジ」の実際. 看護教育. 2012;53(11):944-950.